

たゝらについて、まとめるために、考古学の資料や、上代史研究のいろいろの論文をよんでいるのであるが、気がつく事は、最近の考古学や上代史研究に、鉄器の重要性が徐々に認識されてきているようであるが、然し、製鉄技術についてはまだ充分な関心ははられていないように思われる。これは、技術史研究者からの協力が必要な分野だからであろうか。従来、こうした分野では、俵口一氏の研究や又、長谷川熊彦氏、窪田蔵郎氏、そして、本論でしばしば引用した新沼鉄夫氏らの先駆的研究がある。やはり、鉄滓や、鉄片を、化学分析や顕微鏡による組織研究などで、次々とおいつめていく手法をとるべきであろう。

さらに、気がつく事は、こう考えると、古墳などから出土する鉄片や、金くそなどが、非常に重要な手がかりとなる筈であるが、奈良、滋賀、大阪など日本の上代史で重要な役割りをした地域での開発がすゝみ、金くそを採取できない状況になりつゝある事が気がかりである。たとえば、びわ湖北岸の高島郡遺跡跡からの金くそは、宅地造成か何かのために、今では採取できないときく。

重要な、たゝら跡は、やはり考古学研究や上代史研究に重要な筈であり、一層保存への努力がなされねばならない。

(帰路、仙台で東北大学が最近こしらえた金属博物館をのぞいたのであるが、事務局の方の意見では「金属の工学研究を中心にした博物館に将来していきたい」との事であった。)

金石あるいは遠野・千厩といったところに、「東北和鋼記念館」ができる日を夢みながら、
擱筆する。 (昭和50年10末日)

ケルン「経済政策研究所」の人びと

— 西ドイツ留学記(1) —

玉垣良典

大内兵衛氏の『経済学五十年』という回顧録によると、大正年代、第一次大戦後の時期にドイツに留学した研究者に三つのタイプがあったといわれています。第一のタイプは舞出長五郎さんに代表されるもので、大学の講義を聴くほかは、もっぱら下宿にこもって書物を読む勉強家のタイプ、第二のタイプは田中耕太郎さんのように音楽、演劇の観賞など芸術に親しみその

国の文化を理解することに主眼をおく行き方、第三に、大内さんご自身が試みた行き方で、新聞を精読してその国の政治社会動向と実際問題を理解することを重視するタイプ。実際には外国に留学した者は大なり小なりこの三つの方向をそれぞれに組合わして専門分野の研究とは別に他国の社会と文化に接して学問的視野を拓けようとするんだらうと思います。わたくし自身についていえば、第一のタイプの行き方は初めから期待できなかつた。それはわたくしが舞出さんのような篤学の士ではないということもありますが、大内さんらの時代と異って現在の西ドイツにはかつてのような学界の巨星というようなわれわれ日本の研究者が仰ぎ見る大学者は見当らない。西ドイツの場合戦争とナチス支配時代の後遺症という事情もあるでしょうが、西ドイツに限らず現代という時期は学問世界の分業化が進んで戦前までのようなスケールの大きい大学者が育ちにくくなっているということがあります。他方日本の学問水準も上昇して、少くとも先端部分では比較劣位はもうそれほど感じられなくなっている。部分的には比較優位の部分もできています。例へば計量的なマクロ・モデルの開発の分野とか、マルクスの原典研究の分野などはたしかにそうでしょう。このような状況ですから、誰かについて学ぶということも、戦前の留学のように目標が自明でもなく、単純でもないといわなければならない。もし学ぶところがあるとすれば、学界の先端に行く文献を探してそれに取り着くというやり方によってではなく、外国の学問生産世界での分業編成のあり方、現実の経済と社会の動向と対応した学問的テーマの設定と解決のあり方つまり学問の生産様式を内在的にとらえた上で、学問的作物を研究し評価するという、やや手数のかかる手順をふまないではあまり得るところがないのではないかと思います。

第二の教養人のタイプはわたくしの受容能力、鑑賞能力の制約から問題にならず、ただオペラの本場で、ドイツ第一級のとまではゆかないにせよ、まずは上級の部に入るというケルンのシュタット・オーパーで、モーツアルトとワグナーを中心としたドイツ、オペラを賞味する機会に恵まれ、冬の日の生活を思い出深いものとしてくれたことを附言するにとどめます。結局わたくしが試みた行き方は大内方式をかなり意識的に採用して、できるだけ自分なりに西ドイツ経済像——日本資本主義像と対照させた——を結像させ、この表象を頼りにして、文献を選択してゆくという行き方です。これはかなりエネルギーのロスもともなうやり方ですが、彼地の学問的生産様式を内側から理解しようとする時には、やはり必要な準備作業の一つではなかつたかと思っています。

さてわたしの世話になった研究所はケルン大学附属「経済政策研究所」(Institut für Wirtschaftspolitik an der Universität zu Köln)で、大学から歩いて十数分、市

心とは反対側のシュタット・ヴァルト（市の森林公園）の方向に拡がる閑静な住宅地の一廓にあり、もと市民の住宅だったのを買い取って使っているもので、想像していたより小さく、最初訪ねたときは目につかず、なかなか発見できなかったくらいです。この周辺には大学関係の研究所やゼミナール（講座研究室に相当）が住宅の間に点在していて、わたしの研究所と中庭をへだてた向い側には財政学研究所がありました。研究所は1950年代はじめにミュラー・アルマック教授（Alfred Müller-Armack）によって創設され、現代の経済政策課題の研究と当面の緊切な政策問題にたいする積極的な提言を行うという、かなり実践的志向性の強い目的をもって出発したようです。研究所は当初から年二回刊（現在は年三回刊）の紀要（Wirtschaftspolitische Chronik）を発行していますが、この目次を通覧すると、1950年以降の西ドイツ経済の推移がその時々論議の焦点になった政策問題の変遷という鏡に映し出されているのを見るようで興味深いものがありました。わたくしの窓口になってもらったミュラー・アルマック教授はすでに75才の高令ですすでに退官しているが、いぜん研究所の指導者の一人で、これに現役の二人の教授を加えた三人のディレクターの集団指導で運営されていた。まずこの三人のプロフィルの紹介から。研究所創立者のミュラー・アルマック教授は1920年代半ばにケルン大学で教授資格取得（教授志願論文「景気政策の経済理論」）、1938年から1950年ケルン大学に来るまではミュンスター大学で教鞭をとっていました。景気理論と景気政策の研究から出発し、戦時中は経済社会学、宗教社会学の研究に集中し、マックス・ウェーバーのテーマを継承して資本主義成立期以降、とくに19世紀に拡張し、その帰結を現代にまで追跡した労作『神なき世紀—現代の文化社会学によせて—』（Das Jahrhundert ohne Gott, 1948）は戦後に刊行され高い学問的評価をえたといわれ、これはその後彼の主著ともいえる『宗教と経済』（Religion und Wirtschaft. Geistesgeschichtliche Hintergründe unserer europäischen Lebensform, 1959）に再録されています。戦後は再び経済政策の研究にかえり、『経済指導と市場経済』（Wirtschaftslenkung und Marktwirtschaft, 1947）では、戦時期のナチス統制経済の批判を通じて戦後のあるべき経済体制を「社会的市場経済」（Soziale Marktwirtschaft）として提唱しました。この呼び名は後にふれるように現在では戦後の西ドイツの経済体制の一般的呼称となるまでに普及しましたが、彼はいはばその名づけ親だったわけです。それだけでなくエアハルトの蔵相時代ポンの経済省の次官として自ら提唱した理念の現実化の実践の面でも貢献が少なかったといわれ、今でもケルンの学生たちの間で「社会的市場経済の父」という尊称で半ば伝説的に語られているようです。初めて研究所で挨拶を交わした時の印象では厳めしい学者というより庶民的な感じの好々爺というところで、

近作の論文抜刷二、三篇と前記『経済指導と市場経済』の第二版を進呈してくれました。しかし高令にもかかわらず、すこぶる活潑で、かつ研究所の現役の他のディレクターよりも戦動的と見受けました。エアハルトと共著で『社会的市場経済——宣言1972年』という啓蒙的書物を出したり、刻下の重要な政策論題について活潑に発言を続けています。例へばさきにはキールの世界経済研究所長のギールシュ教授ら数人の学者と、インフレ下の投資資産価値保証のための指数化方式 (Indexierung) を提唱して論議をよび、最近の不況では当初の一般の楽観説にたいして、前記ギールシュとともにいち早く戦後最大の不況に警告を発し、1920～30年代の景気循環史を想起すべきだとする歯切れのよい発言は、景気の前途について慎重な模索状態にあった一般の意見の中では異色のもので注目されました。彼の見解では今回の不況の真因はたんなる有効需要の不足でなく(したがって需要補給政策によって解決しうるものではなく)、企業利潤への過重荷負にあり、「社会国家」の費用を企業負担に転嫁してゆく社民党政府の「なしくずしの社会化政策」にたいする企業家の不安と不信も無視できない要因であると指摘し、社民党の推進する「社会国家」の限界に警告を発するものでした。その政策的結論ではCDU(キリスト教民主党)やBDI(ドイツ産業連盟)の政策路線と軌を一にするもので、それをリードする発言として興味がありました。ケルン経済政策協会(Kölner Wirtschaftspolitische Gesellschaft)という不定期の集りがあり、わたくしも招かれて二回ばかり出席する機会がありましたが、この集りは、この研究所がきも入りで財界、政界の有識者と時々の経済政策課題について意見を交換しあう場としてもたれています。ケルンの商工会議所の会議室やホールを会場に夕方6時から2時間位、終ってから階下のレストランで形式ばらない夕食会があり、ビールを飲みながら、自由に議論が続けます。わたしが聞いたのは連邦銀行理事のゴホトという人が Bundesbank の「貨幣量政策」について報告したのと、DIH(ドイツ商工会議所)の研究所所属の若い研究者が「国際的、国内的視野からみた産業構造の変化の見通し」というテーマで報告したものでした。参加者は四、五十人でしたが、ミュラー・アルマック氏がつねに議長をつとめ、出席した財界人の彼に払う敬意のほどをみても、彼の存在の大きさを如実に示していると思えました。彼はわたくしがこの研究所に世話になるのに窓口になってもらった人でしたが、現役でなかったということから自然に大学や研究所で接触する機会には他の教授に比べて多くはありませんでした。しかし今から考えるとやり方次第ではもう少し意識的に意見をたたく機会をもちえたのにと少々惜まれます。これは彼が寄りつき難い人であったということではなく、むしろ主たる障碍はわたくしの側の言語能力にあります。というのは彼は決して聞き上手の人ではなく、いつも自説をまくし立てるタイプの人です。しかもそのドイツ

語は速いというだけでなく口の中にもって聞きとりやすく、ヒヤリングだけでかなりのエネルギーを消耗します。そんなわけで、最初一、二回質問をもってアプローチを試みましたが、質問の核心に入るまでに、彼の長口舌を拜聴する破目になり、その中に当方の語学的負荷限度に近づき、肝心の本題に入った時には時間切れとなることが多いのです。これでは効果がないので、いずれ論点をまとめて正式に質問状をしたため、再度見参に及ぼうと引下った次第ですが、当方の怠慢もあり、その機会をもたず終ったのは残念でした。

研究所の運営面の責任者であるヴィルゲロート教授 (Hans Willgerodt) は、わたくしより少し年輩の人で、学部で経済政策の講義を担当しています。通貨論と通貨政策が専門で、近年では EC 共同通貨政策や変動相場制に関する研究のほか、「秩序政策」(Ordnungspolitik 西ドイツ学界特有の用語で、経済体制論的見地よりの経済政策のこと)の見地よりさまざまな政策問題を論じた論稿を発表しており、最近では財産形成政策をも手がけています。彼はミュラー・アルマックの協力者として研究所創立当初から研究所の指導にあたってきたボン大学のフリッツ・マイヤー教授の高弟だということで、アルマック教授の直系の人とは若干膚合いを異にし、学派的にも ORDO (フライブルグ学派の新自由主義) 主流により近い立場のようでした。(現に彼は ORDO 年報の編集者の一人に名を連ねています)。わたくしは彼には研究所の他の教授より一足早くケルンに来る前に面識をうる機会がありました。というのは当時南ドイツの小さな町のゲーテ・インスティテュートで語学の勉強していたわたくしは、1964年9月上旬にチューリッヒで開かれた社会政策学会の年次大会にたまたま出席することになり、ここで初めて氏と挨拶を交すことができたからです。「市場経済における安定政策」という共通論題の下に開かれたこの学会で、彼は総合論題の報告者の一人として「市場経済的秩序政策による安定の促進——必然性と限界」というテーマで報告しました(この学会の様子は拙稿「政治を再発見した経済学」『エコノミスト』1974年12月25日号を参照)。物価安定に主眼をおいた西ドイツ連銀の「通貨量政策」を支持し、競争促進的政策の価格安定化的効果に強い信任を表明する彼の立場は、ORDOの基本的見地を直截にのべたものでしたが、最後の総合討論で発言した彼の姿は顔を紅潮させて自説を反復力説し、ケルンで日頃接した温厚な紳士とは別の一面を示していて印象に残っています。以前アメリカに留学してハーバラーのもとで研究したことがあるというだけに国際感覚がある紳士で、もっとも大学教授らしい雰囲気をもった人でした。わたくしとは思想的立場が同じではないのを承知で、親切に研究上の助言(研究文献の案内など)をしてくれ、実際には研究所滞在中ヴィルゲロート教授に一番世話になりました。有難いことに彼のドイツ語はそんなに早口でなく、また明朗で聞きとり易く、ドクター

・ゼミ (Doktoranden-Seminar 博士論文志願者のゼミ, 大学院に相当) に出ても, 議論の大筋がほぼフォローでき, 語学上のシュパヌク (緊張) が少なくてすみ助かりました。

話がでたついでにこのドクター・ゼミについても少しふれておきましょう。彼のゼミには留学後半の夏学期 (4月より7月初めまで) に参加させてもらいました。ゼミナールの建物は研究所と大学の間置の住宅街に物理学研究所の大きな建物と向い合って建っています。これも研究所と同様もともと一戸建ちの民家を後から大学で買い取って研究所にしたもので建築学の研究所と共同で使っています。ゼミはこの民家の地下室を書庫とゼミナール室に改装した部屋でやりますが, 外界の音と遮断されている上に, 夏は冷しくて大へん調子がよろしい。ゼミは午後5時半から始り, ドクター論文の第一次草稿や準備的報告を中心にしておこなわれています。参加者は常時12,3人でドクターをすでに取得した者も2,3人が加わります。途中でお茶がわりにビールの栓を抜き, 少量のアルコールが加わるせいか, 発言はなかなか活潑で, 教授が交通整理と論点要約に時折発言する他は自動的に進行します。報告討論のやり方は, これはアメリカ式だということですが, 報告者のレポートが一応終わってから議論を始めるという日本流 (これはもともとドイツ流だったそうですが) の仕方ではなく, 報告の途中で論旨をただしたり, 関連質問を発して議論がしばらく続き, その都度報告が何度も中断します。この流儀はここだけでなく, 他のゼミでも後述の研究所の研究会でもそうでしたから大体现在一般的な方式のようです。報告者には少々やりずらいのではなからうかと注意して見ていましたが, 報告者はタイプで打ったペーパーを用意してきているので途中で混線して終点に達しないという心配は無用で, それにもともと議論好きで体格からもスタミナ十分の連中ですから何時間被告席に座っていても疲労の気配もありません。こうやって報告が終るまでにかなり時間を要し, 続いて重要な論点について論議し, 最後に教授の講評と今後の研究への指示で締めくられる頃には大抵9時近くになり, 日没の遅いヨーロッパの夏の日も黄昏となります。このゼミで聞いた報告テーマは「対外経済均衡の問題 — 競争政策と通貨政策の見地より」, 「ペターソンの無害なインフレーションの命題」 「イギリスの経済政策 — 所得政策を中心に — 」といったところで, 国際経済政策の問題に集中していました。わたくしは時たま日本の問題について関連質問に答えた他はもっぱら聞き手に終始しましたが, テーマが自分の関心に近く, それだけに議論の大筋がつかめるだけに, 議論に割って入れない欲求不満をしばしば覚えました。一度口を切れば何もそうむつかしいことはないと知りながら, 後がうまく続くか不安で, つい気おくれしてしまう。プロフェッサーのくせに稚拙なドイツ語で進んで恥さらしをするにも及ぶまいという心理的なプレキもかかる。そんなわけで彼らとの活潑なやりとりを聞いていると, 無

性にテーマを同じくする誰かと母国語で自由にディスカッションしたいという強い欲求がふつと湧いてくるのを何度か感じました。

ヴィルゲロート教授はいかにも育ちのよさを思わせる貴公子の風ぼうがあり、最初は少し取っつきにくい印象でしたが、接してみると親切な人で、それに几帖面な性格の人らしく、抜刷をもらった礼に所見をのべると、必ず丁寧に彼の見解や参考意見を書いた返事をくれ、人を紹介してくれました。内容のこみいった話は、手紙によって意志疎通と意見交換をつづけましたが、よく面倒がらずに初面識のわたくしにつき合ってくれたと思います。初めの頃彼は手紙で“ Ohne Scheu (内気にならずに、遠慮せずの意) 私や私の仲間に近づいてくれ ”とアドバイスしてくれました。わたくしは社交的な性格ではないが、けっして内気な方ではなく、研究所でも最初からかなり無遠慮に振舞ってきたつもりですが、どうやらわたくしが書物を読んだり、手紙を書いたりするところからみるとドイツ語がかなりできるのに、その割りに対話に入ってこないのが、東洋人的遠慮と考えたらしいのです。読み書きはできるのに会話がうまくできないという日本式語学勉強は向うでは想像の外なので、いやこれは Scheu のせいではなくアンバランスな語学力のせいだということを釈明しなければならないということもありました。ともかく氏の親切な配慮のおかげで研究所での滞在期間を違和感や疎外感もなく過させてもらったことを感謝しています。

もう一人の研究所のディレクターであるヴァトリン教授(Christian Watrin) は、一ばん若く40才前半、一見ケーリー・グランドに似た風貌をもつ美男子で、彼とは一ばんおくれて接触をもつことになりました。彼はミュラー・アルマックの直系で、この研究所で長く研究生生活を送って後、ポッフム大学で教授となり、少し前にケルン大学に帰ってきた人で、学部ではヴィルゲロートとともに経済政策の講座を担当しています。彼は中小企業研究から出発し、景気問題、通貨政策問題など個別的な政策分野の研究がありますが、理論家膚の人で、最近では政策の思想的哲学的基礎づけとか、方法論的研究に関心が移り、矢継早やに次々と論文を発表し、現在この研究所ではもっとも多産的な研究者と見受けました。彼はマルクスにも関心があり、大学院ゼミ(Diplomanden und Doktorandenseminar)では、マルクス経済学の方法論的検討を中心テーマの一つにかかっています。ケルンではマルクス研究の希望者は彼のところに集まっています。ヴァトリン氏には研究内容の上でもっとも興味を覚えたので、欲張って夏学期間彼のゼミにも出席しました。この方はヴィルゲロートのゼミより参加者の年令が若干若く、常時参加者は数名でした。ゼミは大学のキャンパスの北端に戦後建った通称WISO-Hochhausと呼ばれる経済学部関係の研究所・ゼミナールを収容する8階建の高層ビルの最上階にある彼

の研究室でおこなわれました。ここでの報告テーマには「マルクスの未来社会論」「マルクス資本蓄積論の体系とその経済学的批判」「国際通貨体制の問題」「市場経済における管理的統制の問題」といったもので、われわれにもいっそう馴染みの深いタイトルが並んでいます。

「マルクスの未来社会論」では、報告者はマルクス自身の社会主義・共産主義に関する論及の文献的考証解義よりも、オタ・シクやブルス、ユーゴーの学者など現存の社会主義を対象とした東ヨーロッパ諸国の経済学者の著作を中心に、社会主義経済下での経済計算や経済管理の問題、市場経済原則と社会主義経済の両立可能性、労働者管理の問題などの諸側面について、現実をふまえた現在の社会主義諸国のマルクス経済学者とマルクスの所説とを対比しながら論ずることに主眼がおかれていました。だから表題は正確には「マルクスの」ではなく「マルクス派の」とすべき内容のものでした。ヴァトリン教授はカール・ポッパーを好んで引用する人ですが、市場経済と社会主義のイデオロギーは調整可能か？市場経済は「開かれたシステム」だが社会主義経済はそうではない。また動機づけの問題を解決することが社会主義経済の大問題であることを指摘し、社会主義（中央管理経済）にたいしネガティブな立場からの問題提起的発言をしました。参加者の中に一人マルクスをかなりよく読んでいる学生運動上りと覚しき元気なドクター志願者（彼はマルクス蓄積論をテーマとしていましたが）がいて、ヴァトリン氏の意見に喰いつき、マルクスの原典によって反駁を試み（たしか社会主義的所有と自由の問題に関連して）、それに報告者や他の参加者も加わって、このゼミもなかなか活潑で楽しいものでした。ただマルクスの原典理解の水準という点でいえば、どうも討論している人びとすべてが、Privateigentumと individuelles Eigentum とを区別せずに、私的所有で一括げに論じているので議論がある点以上には進まないようでした。近年の日本の市民社会論研究での成果を披露するこれはよいチャンスだったわけですが、今回は語学の問題でなく、初回からマルクス学の知識をひけらかすことに遠慮が働き見送りました。後で知ったバトリン氏の性格からいってそれは無用の遠慮でした。むしろ日本人的基準からいって少々厚かましく発言する位でちょうどよいのだということは、またしても後からわかりました。彼はいかにもケルン子らしい陽気で快活な人柄で、ユーモアをいってよく皆を笑わす、少々茶目っ気もある面白い人物でした。ただ研究会やゼミナールでの彼の早口で、あたかも鼻歌をうたうような抑揚をつけた、一瀉千里に流れるようなドイツ語には悩まされました。彼はケルンではリベラル左派あるいは社会派リベラルの傾向を代表し、最近のORDO年報にも「社会的所有と労働者自主管理——社会のヒューマニズム化の途——」と題する論文を発表しており、今後を注目すべき論客の一人だと思えます。

最後に研究所の定例研究会に簡単にふれておきます。これは *Institutskolloquium* といって、コロキウムというのは一般のゼミナールより参加者が限定され、とくに研究所デレクターから招待されたものに限られます。学部ゼミ生は指導教授との話し合いの上随時参加できると便覧には出ていますが、わたくしの知るかぎりそのようなケースはなく、ドクター・ゼミ生も特別の者しか参加せず、原則としてドクター以上の参加が建前のようなものでした。学外の専門家にも招待状を出します。一ゼミスターに三回位の割で開かれます。場所はさききのべた *WISO-Hochhaus* の8階の図書室兼会議室で、午後5時から8時すぎまで、参加者は20人内至30人、*ヴィルゲロート*教授の司会でおこなわれます。報告者は研究所の所属メンバー（ドクター、ドゥーツェント、教授）で、ドクター・ゼミとは異り、論題は一そう特殊化され、それだけに西ドイツの経済事情に通じていないと、いきなり聞いただけでは論旨がたどれないことがしばしばです。討論に至ってはもう早くてわたくしの耳ではとてもついてゆけない。レジメがあれば何とかなるのですが、大いレジメの用意なしでやるので、苦業を強いられるわけです。招待状で報告者とテーマがわかると、できるだけその報告者の関連論文を読んで出席するようにしましたが、大いはまだ活字になっていない最新の研究成果を発表するので、そういつて準備はあまり効果がないことがわかり、ぶっつけ本番でのぞみ、時にはテープをとって聞きました。しかし直接聞いてキャッチできなかったものは、後でテープをきいてもわからないことが多い。そこでとくに興味あるテーマについては、論旨のよくつかめなかった点やとくに議論が白熱した点については翌日研究所の若い人にたずねて理解を補いました。それにしても議論の最中に発言者がよくウィットをいって満座が哄笑しますが、悲しいかなこの笑いの意味をつかむのは最高にむつかしい。もっとも疎外感を味わう瞬間です。

コロキウムで報告された論題は、「貨幣減価の下での企業の実物資産価値維持の問題」、「学生、教授および租税支払者 — *Gruppenuniversität*（学生・助手・教授・職員各グループの参加の下に運営される大学管理方式のこと）の経済的分析 —」、「オイル・クリーゼの対外経済問題」、「経済安定法の改善のための提案」といったものでした。みられるようにオイル・クリーゼの問題を除き西ドイツ独自の背景を知らないと理解しにくい問題です。「世界的同時不況の原因と対策」といった大きなテーマが現れることを期待しましたが、残念ながらそれはなかった。大学問題を報告したヴェトリン教授の外は、報告者は若いドクターだったから問題がかなり限定されるのは止むをえなかったと思います。しかしこの研究会に出ると、ふだん研究所では顔をあわすことのない学部のスタッフと顔馴染になったり、他大学の研究者（大い研究所と以前何らかの関係があった人です）に紹介され面識をうる機会がもてるというメリ

ットがありました。面白かったのは研究所の指導教授の三人がしばしば意見を異にし、激しくやり合うことで、論文だけから判断するとほとんど同意見のように思えるのに、具体的な方向選択になると研究者の体質のちがいがから、対立が生まれます。正面の議長席に陣取った三人が、まるで他の出席者が目に入らぬかのように、しばらく三人で懸命に主張しあうさまは、日本ではお目にかからぬ光景でした。今でも鮮かに思い出す情景を一つだけあげますと、「経済安定法の改善」というテーマでの研究会の場合がそうでした。報告者は最近「マクロ誘導の理論と実践 — 政治的意志形成の影響下での景気政策的草案」という教授資格取得論文を発表したスタルバッティー (Joachim Starbatty) という人で、彼とは研究所でよく顔を合わせ言葉交わす機会がありました。彼はまえに連邦議会のCDU議会フラクションの研究部門で働いていた経験の持主で、経済安定法の成立と実施の時期を政策決定中枢に近い所で観察する機会をもち、前記論文もその間の経験を理論化した力作ですが、彼はその知見にもとずき、安定法の改善のための制度的変更に関する提言を試みました。これにたいしミュラー・アルマック氏はエアハルトの退陣と安定法成立の経緯を回顧し、エアハルトの意図が貫かれず、社民党の成長志向が安定法に強く反映されるにいたった点を強く批判した、かなり党派的ともとれる発言をしました。バトリン氏は、それをうけて方法論の見地から一般的にマクロ経済的予測の理論的射程に懐疑的見解をのべ、報告者の基本的見地 (マクロ誘導の機構的改善) の有効性に根本的疑問を提示するネガティブな発言をしました。これにたいしてヴィルゲロート氏は、将来予測とマクロ誘導にたいしてわれわれの *Machbarkeit* (なしうること) の限界は当然あるが、その限界を一步步拡張することは可能であり、理論的に可能なことと実際に可能なこととの間のギャップを埋めようという報告者の提案は建設的な意味をもつと支持的発言をしました。研究者の個性が飾り気なしに現れていて、それをつぶさに観察できたことはとてもためになったと思います。 (1976. 3. 25)

〔 所 報 〕

○ 小林良正参与逝去

小林良正社会科学研究所参与が、1975年12月29日逝去され、1976年1月19日千日堂会堂にて告別式が行なわれた。 — 先生の最後の労作『日本資本主義論争の回顧』(はしがき、1975年夏)が出版された(1976年4月、白石書店)。

○ 平館利雄所員送別会 1976年3月11日(木)午後5時から如水会館(神田一ツ橋)において、経済学部と社会科学研究所合同の「平館利雄先生送別会」として行なわれた。

相馬勝夫学長、佐藤博経済学部長の送辞、大友福夫社会科学研究所長からの記念品贈呈、相山喜代子経済学部教授からの花束贈呈の後、高橋長太郎経済学部教授の音頭で乾杯、平館利雄所員から謝辞とともに今後の研究への抱負が語られた。宮下誠一郎所員（経済学部助教授）の巧みな進行で、野原四郎研究員の破格な送辞、小林義雄元所長の送辞も交えながら、参加者（54名）一同、別れを惜しんだ。なお、平館利雄所員から、社会科学研究所にロシア語文献が寄贈された。

○ 春季合宿研究会 恒例の春季合宿研究会が、1976年3月19日（金）～20日（土）にわたって、私学共済湯河原宿泊所敷島館で行なわれた。

報 告

戦後西ドイツの経済体制と経済思想

玉垣良典所員（司会 石渡貞雄所員）

ケインズ経済学の再評価について

池本正純所員（司会 森 宏所員）

日本における研究投資批判

大西勝明所員（司会 西岡幸泰所員）

○ 所員移動

1976年3月末をもって、3名の所員が転出・退職され、所員総数は75名となった。

転出・退職された所員は、平館利雄、大橋周治、山本満の3所員である。

<編集後記> 今号には、黒岩所員と玉垣所員から寄稿いただいた。とりわけ、黒岩所員からは、編集担当の要請どうりに昨年原稿を届けてもらっており、発行が遅れたことを深くお詫びしておきたい。

5月12日、経済審議会から、今年度を初年度とする「昭和50年代前期経済計画」が答申された。不安なく将来設計のできるゆとりと厚みのある経済社会の実現がめざされているらしい。しかし、ロッキード事件の解明は停滞ぎみだし、本代他物価上昇の続行は、増々財布の中味を薄くし、心細くさせる。さらに、翌日の朝日新聞によれば、一部国立大で教員の「任期制」が具体化しそうである。憂鬱なことばかりだが、五月の風をほんとうに爽やかに感じたい。

（大西）

神奈川県川崎市多摩区生田 4764

専修大学社会科学研究所 電話（044）911 - 8480（内線33）

（発行者） 大 友 福 夫